

Interview with the Brilliant Students

受賞学生インタビュー

藝大に在学している学生たちは、多くの公募展やコンクールで栄誉ある賞を受けている。受賞学生たちが賞にいたる努力とさらなる意欲を語る。

第2回

櫻井稔

◆大学院美術研究科修士課程(デザイン専攻)一年

情報処理推進機構

「未踏ソフトウェア創造事業(未踏ユース)」「天才プログラマー/スーパークリエイター認定



(Sequential Graphics) 「獅子」

父

が藝大卒のデザイナー、母が藝大卒のヴァイオリニストだったので、小さいころは、ヴァイオリンを習ったり、父のデザイン事務所で遊ぶような子供でした。残念ながらヴァイオリンには向いていませんでしたが(笑)。小学校入ると運命的な出会いが待っていました。先生が旧式のコンピュータを廊下に並べて自由に

使わせてくれたんです。すぐにのめり込み、中学校でもコンピュータ部に入りクラブ活動に没頭しました。中学生のころはまだインターネットも普及していなかった時代でしたが、電話回線を利用して複数人でコミュニケーションが取れる掲示板サービスをつくって提供していたんです。やがてインターネットが普及するとサービスの規模が大きくなり、

一日数万人のユーザーが訪れるようになるなど、成長していく環境を提供すること、箱のなかで何かが勝手に書き換わるといったことにおもしろ味を感じていました。高校時代には藝大進学のため予備校に通ったのですが、親から受験勉強にコンピュータは不要だと撤去されてしまったんです。そこでベッドの下に自分で組み立てた基盤を隠し、テレビにつなげてこっそり遊んでいました。一方で、なぜ自分はコンピュータをしながら絵を描いているのだろうかという疑問が湧いてきたのです。しかし、平面、立体、写真やデザインというのは、あくまでも感動を伝えるための手法であって、それをコンピュータで伝えるのもおもしろいのではないかと考えるようになりました。そうした思いを抱きながら藝大に入学したところ、先端芸術表現科の共通科目に「ネットワーク表現演習」という授業を見つけたんです。

(独) 産業技術総合研究所の研究員である江渡浩一郎氏が講師をしていて、ネットワークとプログラムをそこで初めて本格的に学びました。その方に誘われて研究所のスタッフとしても働くことになり、そこで様々な技術を修得しました。今回「スーパークリエイター」の認定対象になったのは、勢いを描画する、臨場感を描画する、ソフトなんです。「心景」といって、例えば子供が心のなかでみた勢いを、静止画では残すことができないですね。そういった心で思い描いた筆の勢いを画面に残せないかという発想から生まれたのが、「Sequential Graphics」というペイントソフトウェアなんです。僕の場合、会社を興し藝大以外での活動も始めていますが、藝大では「ものを創るとは何か、ものを感じる」とは何か」という表現において最も本質的な部分を学んでいます。表層的な技術は実務の現場でも身につけることはできるのですが、僕にとってブレてはならない軸となる部分は、藝大でしか学ぶことができませぬから。



さくらい・みのる
1982年東京生まれ。東京藝術大学美術学部デザイン科卒業。2008年に株式会社「Fillot」を設立。
<http://www.fillot.jp/>

岩下晶子

◆大学院音楽研究科博士後期課程(音楽専攻「声楽」)二年

第七十七回日本音楽コンクール声楽部門第一位・
同パナソニック賞受賞

日

本音楽コンクールでは、
ネッド・ローレム(一九二三〜)というアメ

リカの現代作曲家の曲を選んで歌いました。アメリカ歌曲というのは、クラシック音楽の世界でもあまりよく知られているとはいえないのですが、私はこだわりをもって取り組んでいるのです。ローレムの音楽も、彼の文学に対する造詣の深さから、難解な歌詞も多く、理解し咀嚼するには苦勞するのですが、それだけに組み甲斐があります。

私は国立音楽大学で音楽教育を学んだあと、東京混声合唱団で八年間合唱歌手として活動していました。演奏会でソロのパートを任されることもあったのですが、合唱のプロとして、歌というものを総合的にトレーニングしていないと感じて、藝

大の大学院に入り直すことにしました。ですから、当初は独唱歌手をめざしたというよりも、合唱団の一員として、自分がしっかりとした音楽を持つことで周りによい影響を与えて、合唱をさらに豊かで深いものにしたと考えていたんです。自分自身のがのびのびと音楽を楽しむために

は、まず自分を磨かないといけないというのが、大きな理由だったので

す。
藝大大学院の声楽専攻には、国別に分かれた演習形式の講義があり、修士の学位取得のためにどの国の歌曲を選ぶうかとても迷いました。最終的に選んだ英米歌曲は、近現代的な要素が強い作品が多く、聴衆の皆さんに楽しんでいただくためには十分に歌いこむ必要があるのです。もともとミュージカルなどをおして英語の歌には親しんでいたのですが、実際に学んでみるまで英米の歌曲がこんなに豊かだということは知りませんでした。

日本音楽コンクールの本選ではいままでない集中力で歌いきることができたので、それだけで満足だったのですが、一位までいただくことができました。このことは、英語の歌曲をクラシックの歌曲として認めてもらえたという喜びとともに、英語の歌曲が新鮮だったことが受賞できた理由かもしれないと感じています。

大学院では、去年はコープランドの連作歌曲、今年にはバーバーを研究



第77回日本音楽コンクール(2008年10月)本選での歌唱 ©毎日新聞社提供



いわした・しょうこ

1975年静岡県生まれ。国立音楽大学音楽教育学科音楽教育専攻卒業。企業組合東京混声合唱団入団。同合唱団退団後、東京藝術大学大学院音楽研究科修士課程(声楽専攻)入学。2008年同大学院修士課程修了。これまでに、吉沢哲夫、小島聖史、佐藤ひさら、朝倉蒼生、永井和子、Ruth Falconの各氏に師事。

対象にしています。アメリカ歌曲、イギリス歌曲のなかにもまだまだ知らない曲が多いので、これからも視野を広げていきたいですね。

九月から二年間、ニューヨークの

マネス音楽院に留学することが決まっています。言葉をしっかりと身につけたいですし、ローレムさんにもぜひ会いに行きたいと思っています。

森永泰弘

◆大学院映像研究科博士後期課程(映像メディア学専攻)三年

第六十二回カンヌ国際映画祭・監督週間部門
「カメラ・ドール賞」候補作品(音響監督担当)



海辺でのフィールド・レコーディング



映画「KARAOKE」(クリス・ジョン・チャンファイ監督)のポスター



もりなが やすひろ
1980年東京生まれ。東京藝術大学大学院映像研究科修士課程(映画専攻)を第一期生として修了後、現在は同大博士後期課程在籍。

僕

の表現活動のスタートはダンスだったんです。クラシカルなものから、ストリート系、即興性が高いモダンダンスまで幅広く取り組んでいました。

そんななかで僕が好きだったマース・カニングハムとも関係が深い、現代作曲家のジョン・ケージを知ったことなどをきっかけにして、「音(=sound)」への興味が芽生えてきたのです。「音に合わせて踊る」ということの非日常性に対する疑問に始まり、人間は日常的に「音をどのように使って生きているのだろうか」という方向に、関心が引き寄せられていきました。

僕のふだんの活動は映画だけにとどまらず、自然の音や街の音を蒐集する「フィールド・レコーディング」から、インスタレーション、モダンダンスに音をつけるといったことまで、メディアを問わず多岐にわたっています。

一応の肩書は「サウンド・デザイナー」

「ナー」ということになるのですが、サウンド・デザイナーというジャンル自体が、日本ではまだ馴染みがないものでしょう。この概念は、国によっても意味合いが異なり、音楽の編集や効果音の製作を「サウンド・デザイナー」と呼ぶ場合もあるようです。ですから僕は肩書きにこだわらなつもりはなくて、音に関わることで自分がおもしろいと思うことならなんでも挑戦するというスタンスをとっています。

今回カンヌ映画祭の「カメラ・ドール」にノミネートされた「KARAOKE」の監督、クリス・ジョン・チャンファイとは、二〇〇六年に釜山国際映画祭で初めて出会いました。そのときに日本人とマレーシア人という違いを越えて意気投合したのですが、翌年のベルリン国際映画祭のワークショップでも偶然再会したのです。クリスはちょうど「Block B」という、集合住宅をモチーフにした短編作品を撮ろうとしていた時期で、彼から「音が重要な

作品になる」と声をかけられコラボレートすることになったのです。この作品はトロント国際映画祭やアルゼンチンのマル・デル・プラタ国際映画祭等で大きな賞を受賞するなど評価を受けました。

「KARAOKE」のほうは長編で、マレーシア人の青年がカラオケ・ビデオの主演に抜擢されるまでを描いた物語に、音の「質感」というものを強く意識して音響設計を施しています。

藝大では、藤幡正樹先生について、自分がなぜこういう表現をするのか、なぜこういうメディアを使うのかといった、「心」の問題について学んでいるところです。いま様々なメディアが交錯して、映画・美術・音楽といった従来あったジャンルの垣根がなくなってきた状態だと思うのです。だからこそ、偏った考え方に傾くことなく、自由であるとともに確固とした信念に基づいて、活動を続けていきたいのです。